たこともたしかです。

しかし、そういわれる実体は何かということがこのころになってやっと気づきました。即ち正常さにまで至らないその距離のこと。なるほど明哲保身の先生からみると、この泥くさい至らなさが、まことに以て憤らしいほどのもどかしさだったのでしょう。私が、偶然刊行させられた「日蓮大聖人と倶に」の本の結びとして、この一句八字の表題をよんだ詩の中に、「賢明さよりも正常さ、正常さよりも誠実さ」とねがうてきた私の長短の一瓣が、その実体だったのです。そう思うと、やはり松木先生の眼光はするどいものとこの頃に思います。　合掌。　（43、6、6）

松木本興師を追悼す

遠藤是妙

一、師の学生時代

師の学歴等は法主猊下歎徳文にも明かでありますから全部省きまして、私の知って居る部分を少しばかり述べることに致します。私が大崎の大学を卒へて、二三年お手伝いした後、大正二年三月身延山に帰りました当時、貞松以来御愛顧の関係もあって、直に日慈猊下大奥随身長として今の主事室に入りました。

随身室には六人の学生が居りまして、その一人が本興師でした。元より随身室に入る者は、世間の陛下に比すれば侍従格、兵隊としては近衛の分斉で、器量もよく身分も相当な者が選ばれます。本興師は中等部の三年で容貌も美しく年少の方で、特に猊下には愛撫せられました。勿論学校の成績もよく雄弁其他の練磨もよくやられました。茲に特記したいことは、学生の時から給仕奉公をさせるということです。本山に居る学生は在院生と称して、その寮の掃除万端向き々々の仕事に奉仕するのですが、大奥随身寮は二人づゝの分担で、二人は猊下洗面の用意、朝勤経の侍者から、三度の御食事の給仕、夕刻御入浴時の流し、在院生お休みの拝礼、御寝所の用意まで大変のことです。次の二人は御居間の掃除、その次の二人は、随身寮から水鳴楼の掃除を朝飯前にすまさねばなりません。これだけは他の学校の学生には見られないことですが、祖師西谷御草庵の昔から、給仕第一と称して、随従者がその範を垂れ、祖山学生の重要な任務となって居るのであります。これがまた宗門僧侶の生涯につながる大事なことになるのです。

其他本山に特別の法要ある毎に、各寮から出仕して塔婆其他の用意から金座鐃鉢等の役までも勤めねばなりません。斯ふ言うことが寺院の重要な儀式の一ツで、皆心得て居らねばならぬことです、ところが今の若い僧侶の中には師匠様の袈裟衣の仕末さへ出来ない方がある様です、注意すべきことゝ存じます。

二、師の教授時代

師の教授時代は助教以来今日の学頭に生を終るまで永いものと思いますが、台学専門であるだけに、この方面の先生少く教授内容としても誠に惜しい人物を亡くしました。台学は宗学の先駆であり、台学を本当に暁めねば宗学の真価は解らない。台学の先生方には更に一層の努力をお願いしたい。

本興師はよい教授であると同時によい布教師であった。本山が師を教学部執事にすると共に布教部長にするのも故なきにあらず。師は明快な弁論家ではなかったが、理路整然として諄々説得する方の説者であった、従て従来の旧説にも偏せず、場当りの政談式でもなかった。故に九州方面の或る後輩から聞いた所では、今迄廻って来られた誰よりもよかったと実感を表白して居られた。何れにしても興学布教を兼ねた良学匠を失ったことは、特に身延山の損失であった。

三、身延のお祖師様

本興師の論策としては数々ありますが、就中この一篇は最も勝れて感銘深いものと存じました。宗祖御一代の晩年をお過し遊ばされた九ケ年の御心境をあとがきに記され、御両親追慕の恩情忘れ難く、殊に清澄山が本宗に帰して、恩師道善御房も妙法の霊域に安住せられ、師弟共に霊山浄土に詣でゝ三仏の顔貌を拝見し奉らんの金言が実現したと思へば、歓喜に堪えないものがあります。

その上本山から東の方の高台寺平に、本興師御両親の墓がある。仰ぎ見て伏し拝まれし師の恩情が察せられ、自分も自らめがしらの熱くなるのを覚えた。

凡そ序正流通の三段に於て、正宗分の勝れて居ることは、元より其の処である。然し正宗分を弘めて後へのこすのが流通分だから、正宗と流通とに勝劣はないわけである。宗祖の御一代に於て佐渡は正宗、身延は流通だと言いますが、その正宗を流通するのが身延山でこの流通がなければ正宗も無に帰するわけです。故に文永十一年五月二十四日の御撰法華取要鈔に本門の三ツの法門之を建立し、一四天四海一同に広宣流布疑い無らんものか。とお互に何処で勉

強しても、妙法の広宣流布を忘れず、最後は身延のお祖師様に習うべきものと存じます。

本興師は身延で生れ、身延で得度し、身延の学校を出て身延山の先生になり、遂に学頭となって新校舎の大成を喜び、間もなく自坊に帰って遷化せられた。今こそ身延山生抜(はえぬき)の先生が幾人か見えますが、当時としては本興師を嗚矢と致します。乃ち一詩を賦して本稿の終りと致します。

悼松木本興師　松木本興師を悼む

本興師逝不堪愛　本興師逝いて愛いに堪えず

校舎新成失学頭　校舎新に成て学頭を失ふ

三処道場君既過　三処の道場君既に過ぎぬ

祖山恭弔大高楼　祖山に恭く弔す大高楼

昭和四十三年五月十九日遷化日恭賦

（元祖山学院教頭）

松木先生を憶う

里見泰穏

先生の略年譜を見ながら、その足跡を追憶していると、先生と身延山との深いつながりを思はざるを得ない。身延